新續古今和歌集

上之二

853
166

類 和歌
函號 二架 七八
書名 二十一代集
冊數 五六

第七一三號

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

帝國圖書館藏

渡邊千秋藏[illegible]

ガラス使用

拾遺　雅宣
かうちをぬしき
すみのすゝき麻ハ
おのかれやわか
しかし[illegible]

新續古今和歌集巻第五

秋哥下

最勝四天王院障子に高砂かきたる所を

前中納言定家

高砂の松ハつれなき尾上よりを（お）のれ秋しるさをしかの聲

前参議經藏家に哥合し侍りける時鹿を
よめる

源通綱朝臣

吹風も身にしむ秋乃夕暮にあはれをそふる鹿の聲かな

仁安百首哥奉りける時

式乾門院御匣

廿次一紙落

まくら山秋（古）もひとつの松にや夜れし月に鹿のなくらん

寶治二年春日社哥合に寄遠鹿といふことを

前大納言為氏

風をく（た）る浦にはまされ塩風に鹿の音をさ須磨の山

讀人しらす

緒者の雪をわけ花すゝきかのふきつ（きてつ）棹鹿のこゑ

水無瀬殿哥合に山路秋朝といふことを

参議雅經

立わくる尾花か下露に鳴鹿の（古）声きく時の山の夕暮

建長三年影供哥合に暮山鹿

拾遺集にゝ合てある
山寺の入あひのかねの
声ことにけふもくれぬと
きくそかなしき

前左兵衛督教定

夕暮乃山の高嶺に鳴鹿もたえまや霧をこえん

文永元年九月亀山殿にて五十首歌合
せられけるにおなしく鹿を

前大納言実教

嵐山入相の鐘に音をそへてしかも暮ぬと鹿そ鳴なる

弘長元年百首歌奉りける時鹿を

後九条前内大臣

しゝ露をまくらの暮れは○ふかくなる鹿や涙なるらん

題しらす

参議為家

後撰
すゝしやとてよの
らしおもひもそ
あきまてへつゝ
きのみ山

ちあて我秋の心をうけしやはほんの暮に鹿の鳴らん

新玉津嶋社歌合に鹿

権大納言良春

おもしらぬ高円のをのに鳴鹿にいと秋はしらやらん

康暦二年内裏歌合に

大納言経信

錦ぬるのさやけき中にいにしへやめんその嵐

秋の歌の中に

前大納言隆直

高砂の尾上の月にほえく松風ちかく鹿の鳴なる

田鹿といふ事を

普広院贈左大臣

万八
[illegible]

新於秋下　小山田の井
[illegible]
続古秋
[illegible]
雅成親王

姓氏録云山城国諸蕃
任那
多々良公
出自御間名国主尓利
久牟王也天皇謚欽明
御世投化献金多々利
金牟居等天皇誉
之賜多々良公

ゆふ山かけの[illegible]

弘安百首歌に　静仁法親王

夕やみの[illegible]
續古秋下　白露の[illegible]田中の井戸[illegible]秋見[illegible]
入道前太政大臣

山田の[illegible]

花山院御製

山田もる人[illegible]

題しらす　柿本人麿
万十　作者未詳　人丸集　六

[illegible]
七八六　万
人丸集

前大納言為世

[illegible]

拾遺秋之補
[illegible]

延文百首歌奉りける時秋田を　等持院贈左大臣

夕日さす秋の山[illegible]

後二条院御製

山かけの稲葉の末の秋の[illegible]

寛治百首歌に　山階入道前左大臣

風[illegible]
天智御詞

延文百首歌奉りける時　民部卿為明

[illegible]

千五百番歌合に　大蔵卿有家

みよしのゝ（伊勢）たのむますさむ葉を（古今）更秋にけて夜はさこそぬらん

新玉津嶋社三十首歌に　藤原為邦朝臣

いくよ春めくるゝ床は桃源の村もさとゝなるらん

貞和百首歌奉りけるに　進子内親王

霧はれて朝日うつろふ山のはのもやこにほひ袖りの影

建長三年九月影供歌合に霧間雁　前左兵衛督教定

峰霧は八重（古）にかさなる山のかひ雁もへたてゝそなくなるに（こゑきこゆる）

湊畔蘆こゝろを　前参議雅有

湊風夕塩もやさき松かけの入江乃波にかへるかりね

文保百首歌に　三條入道前太政大臣

秋来りもこまてやさむからん雁なく南の松の浦風

後照念院関白太政大臣

風さむき花の寝覚にやすらはて明ちかき夜の衣かへり

百首歌奉りける時　前大僧正道潤

ちるかふ秋の袖も露ぬれて（ぬれ）長夜かさねぬ袖の枕

宝治百首歌に　従二位行家

源も
あつらひくらぬに
まつ小隅のなきたり
とくく風やうえ

古
秋風の吹と吹ぬる
後
[illegible]
[illegible]

身にさむく秋風吹ぬといひてしか衣かせとや雁は鳴なれ

田上にて雁をきゝて　源頼之朝臣

めしや誰田面に落る雁の声の稲葉にむすぶ露の玉章

嘉元百首歌に　贈従三位為子

故郷の雲路はるかに鳴わたる声もつゞきし雁の行末

題しらず　前大僧正道慶

秋しらぬ常磐の山に落ちて夕日さす也秋の梢　立

延文百首歌に　擣衣

宝篋院贈左大臣

蘆の屋に音もかくれぬ衣うつ津の国の難波わたりやいかにふくらむ

かくれぐすらし　重之

進子内親王

衣うつ音さへさえて寒けしとあらし吹深き霧に遠き里

題しらず　前関白左大臣

もろともの衣の明けの月もさし霜もおなじ枕より夜寒なる

新玉津嶋社五十首歌に

前中納言定家

さ夜更て寝覚の風や吹らんは誰か思ひの衣うつらん

藤原俊顕朝臣

いつくにも衣うつけり秋風や里をはかれず夜さむなるらん　業平

十首歌めされけるついでに擣衣何首とい

ガラス使用

とはまた世路にまよふ文

後小松院御製

まさ条乃まれ衣をうつ声はこなた古の里も跡めすき

永和百首歌に擣衣

権中納言為重

こぬよひを待も怨の末そやなれゆくさらんの衣うつらん

おなし心を

頓阿法師

何よ衣いくたそめて夕暮もまちうつ代の露そふらん

百首歌よみ侍し時

源持之朝臣

里人いさ我にかさなて秋も寝もやすくとや物覚ん

於左大臣家にて三首歌よませ侍し時里擣

衣を

権中納言雅世

浦風もつゝみもよる秋や空にあしや業平の里に衣うつ也

正治百首歌に

従二位家隆

里とみふかく古しておもまし浜のうら衣うつらん

擣衣を

源持元

夫衣まてもふく人すまふ里ならし秋ゝ衣うつなん

百首歌よみ侍し時

前大僧正義運

まさ浦の秋の夜のさやけき袖のあきもおもひよもうつ衣

題しらす

前大納言為家

かゝる人のこゝろ秘蔵しに済ましてま備の里は哀なりけり

千五百番歌合乃うた　　後京極摂政前太政大臣

うき人の月をハそれとも峨のこゝろの里の松の夕暮

百首乃哥中に　　順徳院御製

山とりのうつゝも枕やハかさねらん八重たつ雲の中のへだてハ

とくし山枯鹿の一つの
をきゝきほのけれ
こゆる秋の夕暮

貞和百首の哥に　　前大納言公泰

小倉山ふもとのおと（と）ふ神みてたしく暗る松の夕暮

延文百首哥に　　後報恩院入道前関白左大臣

時しりぬ松の嵐にたちかへりひくれさわたりし紀岸の松さわ（原も）

前大納言為定

暮ゆかハ庵に立つ雲にまかる山（万七）わけともしのや霞るまし

寶治百首哥に　　太宰権帥為経

旅人の逢坂山に雲こめて（蝉丸）行もかへるもみえぬゆふきり

新玉津嶋社に奉りける哥乃中に山朝霧と云事を　　権中納言雅縁

とを山は秋（古）てれの色もうす霧にたちこめらるゝさかの山嵐

旅乃哥の中に　　法印慶運

足柄の山立てる雲乃上にひとり晴ゝるみねの白雪

堀河院の時百首哥奉りけるに

詞花雑下　大納言公任
いつまてとふらつる浪まにゝ
きえぬへきみほれをさゝゆる
秋の夜の月

続古今雑下　後鳥羽院
志賀の浦にさてつゝゝ
夕霞みをもおほれ
の気色をありけり

修理大夫顕季

さゝ浪のあやにしてみえわかぬ霞立わたる玉川乃里

建仁元年三月盡日歌合に湖上暁霞を

いふ事をよませ給ける

後鳥羽院御製

志賀の浦やまかせて沖八霞こめて杜も勝の見明月

海邊霞

難波潟浪の浪に春たて夕霞よする松の浦風

建保名所百首哥のうち

前中納言定家

万三　人丸
ともし火のあかしおほとに
入らん日やこきわかれなん家のあたり
みず

六百番　寂蓮
須磨の蜑のよる篷の
まのつらゝにさそ
ひしおふしやちるの
しほかぜ

新古
おのつからいひの西
にうつしきの床
わしもちよみかよ
の月

万十四　東哥
とやのゝにをさきねらはり
をさをさもねなへ
こゆゑにはゝにころはえ

新古今　匡房
とやかへるたかのをやまの
玉つはき霜をはふとも
色はかはらし

ともし火の明石の沖の夜舟もわかれてゆく秋の夕ぐれ

百首哥中　權大納言實定

播磨なる灘の湊をへてそゆくみゆるもちぬれ播磨潟

貞和百首哥に　中宮大夫公宗母

暁の川ねにもさむく成にけり小田の面に家や遠らん

小鷹狩をよませ給ける

順徳院御製

蒼鷹にとや野の浅茅踏わけてをのまゝにかる秋の狩人

野草欲枯といふ事を

式部卿邦省親王

初霜のむすふもまたて吉萩原古あらしにそよく色かはるらん

建保二年九月哥合に行路秋

如願法師

旅衣なれをハかし思ふ夜の秋乃あはれを思ひつゝ

應安六年九月十三夜三首哥講せられけ

る時菊離月といふ事をよませ給ひける文

後光厳院御製

うつろふにさもかくて咲く菊の離や月の色ハうつらしらん

権大納言為遠

ゆきそらる月も古あやなしまかきうつろふ菊の離ならさる

久安百首哥に　藤原清輔朝臣

家限なきよはひのことハみちぬらに心ものこる白きくの花

延喜十三年菊合に　坂上是則

家教浪とのみちらしそさへ道経の江乃岸に折ける白菊の花

草をよめる　凡河内躬恒

口わきかてく秋乃やかん菊もあらうつろぬそ花まらん今も

家にて人ゝ離をさらて五十首哥のうち侍

せらるゝ残菊白といふ事を

鹿苑院入道前太政大臣

ガラス使用

秋をへし籬も今はおきそへて霜に白める菊の一もと

弘安百首哥に　後嵯峨院大納言典侍

をく霜よりうつろはんとや秋ふかく色のかはりゆく菊の花

百首哥の中に菊を

土御門院御製

誰ゆへにうつろはんとか初霜のたちまよはせる白菊の花

建保三年六月哥合に行路秋

後久我太政大臣

草枕ゆふかり衣ぬきよりもよそふ野辺の露もおほかりけり

秋の哥の中に

紀貫之

又貫之集云
しらつゆはうへ
そめてきくかへる
山まとの秋をもしる
そめぬなる
山城唐磐山と

白露も時雨はいたくもる山は枝まても色つきにけり

雨中林を　後京極摂政前太政大臣

出くへき人はなくて暮の秋風によそに見る紅葉乃林

水無瀬殿哥合に山路秋行といふことを

皇太后宮大夫俊成女

かさへ錦りもかりつ龍田山木の下に秋の名をと身て

文保百首哥に　藤原行房朝臣

もみちはの秋の林の夕時雨いつまてもかによそにみん

後光厳院に五十首哥めされける時

紅葉　権大納言為遠

おなし枝をわきてそめける時雨や深きへぬ色は松の紅葉

夕紅葉といふことを　入道一品親王道助

松風は尾上の梢ひゝけとも紅葉にちらぬ夕つく日影

最勝四天王院障子に　安達原

前中納言定家

時雨行安達の原のかうし音にまさる浅茅そねかれ行まゝ

貞和百首歌に

正二位隆教

波あへぬ木葉の名残朝日山深くもみゆる宇治の河

紅葉十首歌めされけるついてに紅葉交雲

しゐて事をよそせはちらそ

後光厳院御製

うす紅も冬のあらしより松かえのみとりそ深き末のみち〳〵

二品法親王覚誉家五十首歌に

法印経賢

山姫や染しもしらん紅葉のまとゝに落る滝の白糸

正治百首歌に

参議雅経

それもこれもやおもてに竜田姫あらし吹らん秋の末葉

前参議経盛家に歌合し侍りける時紅葉

刑部卿頼輔

色ふかき御しほの黒木の紅葉はゝ心とさへもそめてける外

ガラス使用

後光厳院に紅葉十首歌めされける時
折紅葉といふ事をよみて奉りける
後福光園摂政前太政大臣
わくる人折かさしてや袖にほしまふくらん山の紅葉ゝ
おなし時風前紅葉　後八条入道前内大臣
君の代やわきてもこん斧のえはくちし山の嵐の紅葉ゝ
紅葉留人　藤原長深
立よれはまたみちのへの苔の上に心をとむる林のもみちは
月照紅葉　侍従為敦
露かゝる月もさやかに照す山の峯てる色の紅葉して

百首歌たてまつりし時秋紅葉　前大僧正義賢
紅葉するうきたの森のいくしほもあかぬ色とや村しくるらん
雅永朝臣
山路ハ霜も時雨もさそひきてそむる木枯の森の紅葉ゝ
建長三年影供歌合に路紅葉といふこと
を　皇太后宮大夫俊成女
しくれ行林の山路ハ紅葉ゝにそむるやこれも人の家路ん
うみわたる山里のもみちを　弾正尹忠房親王
君の家にうつしうゑん千代のむね木々の梢は

ガラス使用

一万八
はなちおくらしかて
秋霧のたつ山の紅葉を
見すてゝや

をくらは梢もかへやしられしいろとし錦して　抜 日本紀
ふるし宿のゆみちもとわりけるかな

後嵯峨院宰相典侍

こし梢よりしくれ紅葉あらつろふやかねてなくらん

應安四年内裏にて題をさくりて人々の哥に
さもつかうまつりける時紅葉深

権大納言為遠

山深く見えてこそあれ山さとや山のもいくしほならん

貞和百首歌に

前中納言雅孝

深山の木梢もおなし神なひ山入日の陰にやうつろひぬらん

入あひのかけさし
月かまされ

百首歌中に　後京極摂政前太政大臣

みよしのゝ花はやよひのものならしを紅葉めく秋の色の紫

弘長元年百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

佐保ひめと竿にかけたれ
竿のちいさきと

唐錦ほしてけり佐保山の梢そて秋の紅葉ゝ

紅葉を

二品法親王尊胤

龍田姫そめし衣のうすもみちまさるあはれに深しとそみる

延文百首歌に

権中納言為重

色やそふ時雨にもるゝ紅葉は深くもなるらんあはれ

百首歌よみし時　林紅葉

二品法親王道助

時雨ハ名をとゝろ人河年作色花草の秋の初霜と

題しらす　　中務卿具平親王

音たてゝ秋そそめあり紅葉ても風の心にまかせてやちらん

前大僧正道意

しくれつゝ紅葉ちるらむ神なひのみむろの山ハ秋の暮る

うへのをのことも題をさくりて百首あ中そゝ哥

つかうまつりつゝくに三ヶ首山紅葉

今上御製

紅やとも月もしくれてみむろ山秋の色さむ葛の下露

月の題の中に　　崇光院御製

ち度や月さへとハあらぬの秋にすくれさ婦の夕くれ

後京極摂政前太政大臣家哥合に暮秋

大蔵卿有家

長月の月も名のミに成ぬれハ秋くれはつる夕やミの空

寂蓮法師

くれて行秋の名残も山の端に月そのこるや有明の空

貞和百首哥に　　前中納言為秀

哭やるもとめぬ日数に秋くれてそめの月乃名残おしき涙

久安百首哥奉りける時

ガラス使用

拾遺　兼盛
くれてゆく秋のかたみに
おくものは我もとゆひの
霜にそありける

皇太后宮大夫俊成
もとゆひの霜を（に）さえくもり秋はつきぬ物の（と）知くもある哉

寛治百首歌に　太宰権帥為房
長月はなかのこりけり長夜のおほし日数にくれぬ秋哉

暮秋の心を　按察使資明
暮ぬを（と）をしむとすれは秋の日のいとゝみしかき夕間なり

文保百首歌に　中納言為藤
野も山も霜を（に）さえくもり秋乃名残にのこる袖の白露

百首歌奉りし時　前摂政左大臣
秋過にねさめ霧に紅葉のちらすまもこえて秋や行らん

万十
まつはらに秋の
かりかねもきなかは
紅葉ちらさるものを

花園宰相實雅
うらかれし野原の花も咲風にゆふをみくや秋もしりなん

延文百首歌に九月盡乃心を
前大納言實名
かきりあれは秋を長月のこよひしも
うけつくして惜はいぬめり

新續古今和歌集巻第六

冬哥

[illegible]

冬のはしめの哥　源順
冬きぬとふきかはるより山里はいとさひしく成まさりけれ

初冬嵐　権中納言雅縁
をはしきも時雨にかはる木まきちる外山の嵐冬やさむらん

千五百番哥合に　源家長朝臣
紅葉せし杉はいつしか山風に松のみ残る冬はきにけり

嘉元百首歌奉りける時初冬　法印定為
冬きぬと夕霜さむき浅茅生に枯葉の風の音ぞさびしき

初冬時雨を　栄仁親王
秋はまや松の梢の紅時雨きのふしもそ冬はさらに

百首歌めされしついてに時雨をよませ給ふ
ける　今上御製
枯はてゝみるさみしさに山のはようつり定めぬ夕日影かな

正治二年新宮歌合に山時雨と云ことを
よませ給ふける　後鳥羽院御製
龍田山梢の紅葉ちりはてゝ流るゝ松にあらしふくなり

貞和二年百首哥奉りける時

ガラス使用

中園入道前太政大臣
はこつふ何かそめんも白乃松原の嵐は色もかはらし

新玉津嶋社三十首歌に時雨
宗久法師
立浦の尾上の雲ははれて又山めくる夕しくれ哉

百首歌奉りし時
前大僧正満意
ゆまよふく寝覚の庵のさ夜時雨ふく寝ゝもぬれにし袖哉

建保二年六月歌合に暁時雨
如願法師
うき袖と思ひ別るゝあかつきの袖にすゝる夜半し時雨哉

嘉禎二年七月歌合に
土御門院小宰相
神無月木の葉しくれぬほかはゝさのゝ孫ぬ秋の軒のいつかし

正治二年百首歌奉りける時
寂蓮法師
宿かるは底もすきん山里をさして時雨もてはゆる人もかな

冬の歌中に
二品法親王聖尊
浦ちらふ稲やゐ行稲葉にさわちらはらふとわかる時雨哉
源満祐

ゆきちる嵐の末のしら雲やかゝる山をこえて行らん

嘉元百首哥に落葉を

従三位為信

枝うつる木葉をいまはさそふらん跡よもみえぬ嵐の松風

後九条前内大臣家百首哥合に

藤原光俊朝臣

今よりはるふとも松のみとり葉もかはらて思はん末の齢（ちとせ）

新玉津嶋社三十首哥に

前中納言資遠

山姫のそめし心やかはるらん松もかはらぬいろのみちをる

法印顕詮

ゆうひまると朝の嵐の跡みえて霜にかゝる人ゝに落葉 外

冬哥の中に

権中納言資清

埋もる庭の落葉に霜消て又あらそはぬ松の色かな

延文二年百首哥奉りける時

入道一品親王尊道

吹風のさそひにたえぬ木葉や神なき杜にも散かゝるらん

後小松院にて人ゝ題をさくりて五十首哥

つかうまつりけるに松の落葉を

権中納言雅縁

甘田川みなかみとをくなりて木の葉をさそふ松の下風

大井河道遠水上落葉といふ事を

源理宣文郎季

大井河なかれも井せく白たへにをくらの山の紅葉ちるらし

住吉社に奉りける哥の中に

正三位義重

みなせ河岩まにおつる紅葉さへも積りて流をせきやしけん

河上落葉といふ事を

良心法師

万三
旅にしてもの恋しきに
やましたのあけのそほ
ふねおきにこくみゆ

瀧川のみなかみこえて木の葉も山をとゝめぬあらしなりけり

正治百首哥に

従二位家隆

此比は霜うちはらふ山川も木葉にせかれ音むせふなる

万四
ちはやふるもちはの
かしのほりきさと
ろしらしらしふ
みまん

冬哥中に

権中納言雅世

木葉のふかくしく池の山河にながれもあらぬ岩間のかよひち

延文百首哥奉りける時

前大納言為定

神のます霧をいかにと宿やとりし月そふけ行て霜とみゆらん

貞和百首歌めされしついてに

光厳院御製

寒えわたる外面の霜もあらはにて霜にかれゆく夜の月かけ

ガラス使用

月落烏啼霜
満天

應永十四年内裏三首歌合に寒月

後宸院贈内大臣

よわ八霜むすほし浦芦生霜よこほれる冬のえ羽

権大僧都堯尋

天津空霜もこほれる夜中にてや月さえのほる雲の上禾

前右衛門督為盛

余所に見し空の海まてこほりはわさゆる霜秋の月の光ま

前参議行俊

山風のみふけさゝ原秋霜よくさゆる霜よこゆる月小

冬の夜の中まて野辺の冬月とりふこほるらむ世

絵ゝ哥

亀山院御製

さりさハ色も光もさえて枯野の霜にあかつきの月

氷色霜月といふ事を

雅成親王

石ましる滝つ山河こゑや瀬にこほれる月乃影そゝく

弘安元年百首哥に

式乾門院御匣

あけやらぬ袖の氷にやとりても猶さえまさる閨の月影

題しらす

卜部兼敦朝臣

有明の影もまさえ庭の雪にうつれるかけの秋霜

延喜十七年閏十月菊の宴せさせ給ひける
時三條右大臣おほんかはらけまゐるとてけりとめ
によそへて白菊をさしてかさしに君にをくる
へしと奏し侍りけれは
延喜御製
色ふかく白き菊の花なれはおりける人の袖やにほはん
前栽乃菊のうつろへるを見て
脩子内親王
霜かれて残の花乃籬にも枝にもうつりにけれ
正治百首歌に　二條院讃岐
霜枯に垣ねのをちをとめてみむ霜の籬に花そとみけり
後小松院位におはしましける時詞をとさう
て三十首歌つかうまつりけるに寄菊恋と云事を
前大納言為尹
露まとふ色の籬乃下萩や嵐の風の秋のをさまる
千五百番歌合に　前中納言定家
霜さむみ花乃枝もうつろひぬる秋てかまつは枝とこそ
百首歌たてまつりし時寒草
前大納言公継
風さむみ霜をやへて霜かれの下草の残の花もふかくなりゆく

拾　手枕のすきまの風もさむかりき身はならはしのものにそありける

山城国相楽郡に棚倉孫神社あり所名

時こそしらぬ万葉

をちかたのさとにたれくらし手枕の

枕のいはやとよそに[illegible]

[illegible]

[illegible]

おなし心を　恵慶法師

手枕の野辺乃草葉の霜枯に身はならはしの風乃寒けさ

続古秋上　白妙乃手枕野の女郎花[illegible]ワかの名こそをしけれ　右近中将経定

後京極摂政前太政大臣家百首歌合に

枯野を　前大僧正慈鎮

秋の名残うつろふ野への人をまてこれはわれにもそへぬ枕そなかき

後九条内大臣家百首歌合に

衣笠前内大臣

浅茅原霜の下葉ハ枯はてゝ尾花もあらぬ野辺の色かな

題しらす　平常[illegible]

うらかれゆく末葉をみて[illegible]

文保百首歌に　中納言為藤

難波人かりてこそやも[illegible]入江の[illegible]

正治百首歌奉りける時冬歌

源具親朝臣

霜こほる枯葉の風のさえさえて野守の鏡つらゝゐにけり

後京極摂政前太政大臣

吉野河瀧乃白浪こほりして岩○にくたくる松風

建保名所百首歌奉りける

僧正行意

古　ふゆたえてしらもわかすに[illegible]清瀧河の[illegible]

後九条前内大臣家百首歌合に　藤原伊長朝臣

さゆる夜ハ嵐の峯もこほりけりやと朝山河の音そ絶ぬらん

谷氷といふ事を　養徳院贈左大臣

河そへは石まに絶せぬ谷水のかけもかくれて氷しにけり

湖水を　後二条院御製

さゝ浪や志賀の浦風さゆる夜ハ沖へ氷りてよる浪もなし

百首歌中に千鳥を　後京極摂政前太政大臣

万十一
まちわびてもうその
河のせちかくなるま
河ぐしのふしするま
ちどりと

續古今旅　二条院讃岐
千鳥なくさほの河とをこえくれは
まちかけてしき河原ふかき路

と夜もすからまつかひもなくあかしつゝ曽我の河原の千鳥鳴なり

嘉元百首歌に　前大納言経継

河風ハ更行月の影さえて宮敷の千鳥ちかく鳴なり

千鳥を　權大納言満親

有明ハ浦も潮みちさそ千鳥声するかたに友したふらん

題しらす　源持遠

風さゆるこの夜やいたく更ぬらん河音すみて千鳥鳴也

千鳥を　正三位知家

うきねする浪に淡路の島かくれ遠さかり行千鳥鳴

建仁元年二月五十首歌に　参議雅経

延喜式粒（イ桒）

有明の月よ[illegible]川風に千鳥[illegible]　堀河

千五百番歌合に

浪のうへに夜をあかし千鳥うちはふく月に梶[illegible]の[illegible]

百首歌の中に湊千鳥といふことをよま

せ給ける　伏見院御製

浪さはくあをしの湊の浦風に入江の千鳥むれて鳴也

揖保

いほ乃みなとにて千鳥乃鳴を聞て

大江嘉言

鵆こそ聲に残してきけ播磨なるいほの湊に[illegible]

後宇多院に十首歌めされける時浦千鳥

なきと　よみ人しらす

[illegible]てあまの衣浦ちとり[illegible]らん

題しらす　多々良持世朝臣

[illegible]袖しの浦に[illegible]

大僧正道順

あしきた野坂の浦に[illegible]水島に[illegible]

永和百首歌めしける時

後八条入道前内大臣

[illegible]浦の[illegible]

堀河院御時百首歌奉る

万三
あしきたの野坂の
うらゆ舟出して
水島にゆかん浪たつな
ゆめ

ガラス使用

前中納言匡房

旅祢す明石乃浦をこき行はいつはるかなるはあれはてにけり

題しらす　　藤原雅顕

あかし潟瀬戸の塩風さむく鳴なれはちかく千鳥の聲

百首哥奉りし時　　前大僧正義運

まとみくれ秋やふかくゆくあかしかた塩干の月にまちえぬる影

ゑ島を　　藤原雅親

むかしにや刈ほされ宿るさ鴨のさわく入江はさそれならん

貞和百首哥奉りし時　　前中納言為忠

水をるれうき浮ふ波に浮寝の枕をならへ夜半のなみ

百首哥奉りし時　　権中納言宗継

池水に流れてぬるゝものいつくれもあらはれてらちのゝ浪

寄霞をよめる　　権大納言實藏

緑なる松にかゝる藤乃花さかりにおもはすかすみて見えし

百首哥奉りし時　　関白前太政大臣

藤のかゝる松にもふかき霞のうちに花のさかりをまたてちりぬる

左大将公名

風ふけはさゝ波よする浪の上にちるさくらの花の宿

嘉元百首哥に　　法印定為

玉葉夕
大納言為家
見わたせは山の葉の
うつりかはるや
さくらの花のちるらん

万二　長哥
海の上乃浦のくさ
もしおけぬらし
さとくらしそ

ガラス使用

ありま山ゐなのさゝ原風ふけはいてそよ人をわすれやはする
大弐三位

ありま山峯もやゝ風さえてわすれも霜にゐなのさゝ原

千五百番歌合に　前大納言兼宗

都にはわすれやすらん秋はなほしのふらん外山の月見しくらす

家百首歌合に霙を

後京極摂政太政大臣

風さむしまたよをこめてあかつきは吉野の山の雲はれにけり

初雪を　権中納言雅世

白雲のよそのうへにかゝりてそめて峯のもち月積る雪かな

おなし心を

法印寛性

昨日まて峯の梢葉のひらくにたに雪かゝりけり

[illegible]

百首歌奉りし時　深雪

権大僧都尭孝

ゆくかたもわかす庭の花のうへにいく重きえけさの初雪

題しらす　恵慶法師

都にはまたしき山路はむもれて法のみちは雪ふりにけり

二品法親王覚誉家五十首歌に

法印経賢

山の端は雪のひかりにわかれて猶そのまゝ明る月

雪の中に　前参議雅有

ちる花のつもりし月の光さへ面かけ見つる雪の宮

正治二年百首歌に　　宮内卿

さひしさをとひこぬ人の心まてあはれしらする雪の明ほの

家にて三首歌よみ侍りし時常盤木雪を　　左大臣

冬きてハきよきみとりハちる花もまよふ峯の松かな

後京極殿にて十首歌よみ侍りし時雲上雪（宮中）　　按察使公敏

ゆきくるゝ嵐ハよそに雲たえて雪にこほれるみかきの松かえ

在良よみ侍るを新勅撰集に於て云々

冬山雪を　　藤原為氏朝臣

かきくれてふりまさるなる山のしらかしえたもたわゝにつもるしら雪

題しらす　　前大納言為家

こほりせし峯の梢をふきかへて山路の雪ハ猶のこるらん

万十
足引の山路もしらす
白かしの枝もとを
ゝに雪のふれゝは

雪歌中に　　藤原雅顕

ふみわけて我こそゆかめ人もかよはぬ山路に雪ハふかくなりにき

名所雪を　　幽提清法

新葉にて　右京間督成臣

吹おろす嵐の音も高師浜のミをの松山雪ふりにけり と

参議雅経

あるゝ人ハまたく二帰乃山梢の猶ハ雪の下折 と

拾
ひの色と積りてらめと
うつゝ山もよる陰の
かけやゝゆらし

百首哥中に雪を　土御門院御製

吉野山とぢめし雪や積るらん入にし人の跡たえてなし

冬哥の中に　曽禰好忠

椎柴もたわゝになりぬ神山の道ハ雪やうつみはてなん

雪満群山といふ事を　前大納言親雅

筑波山は山しけ山雪ふりて梢も見えす積る雪かな

嘉元百首哥に　贈従三位為子

雪ふれハかつくれぬる鏡山ちりの麓の外めのみそ見る

万十
行小舟とませの山よ
うら風のけはしく悲
しまかうらよする
又十三字

詞云
思ふとも恋ふといはしあ
とつの玉の生田の杜
乃秋のはつ風

題しらず　式部卿邦省親王家小督

吉野山峯の梢もみえぬまて里のふもとハ雪深かりけり

山雪といふ事を　鎌倉右大臣

夕されハ浦風さむしあまを舟とませの山に雪ハふるらし

新玉津嶋社五十首哥に雪　前大僧正良瑜

世をのかれ入にし跡もなく吉野山雪さへ深き岩のかけ道

嘉久元年七月哥合に林間雪　従二位行家

さらぬ人も林風そよく袖ぬれて生田の森ハ雪のしたをれ

後宇多院に十首歌奉りける時野径雪

浄土寺忠房親王

白妙の野原の雪にうちはらふ（古）をちかた人の袖まよふらん

花よする心を

前大納言實教

狩人のあさ川渡や狩くらん跡しら見えて○狩人の（白）雪

雪御哥中に

順徳院御製

まつみやる里には人の跡たえて野中の杉に雪ふりつゝ

元亨三年亀山殿千首歌に

式部卿邦省親王

こし井河こほれるかたは渡やらて雪にうもるゝ渕ゝのさゝら

○和二首白波の篇といふ見のやうよせ又も笑とこそ波乃以てやんでするもきこゆ

○丨

応永十四年内裏三首歌合に浦雪

後三条入道前太政大臣

白浪の関路に来り（行平）つもる雪を（た）くみ須磨の浦風

小槻益躬

行浪や（万九）釣するあまの袖までも雪ふきかくる志賀の浦風

祝部成繁

打よする沖津志ら浪音さえて雪にけりみの浦ちせかな

住吉社によみて奉りける歌の中に

大納言重光

沖の海や奥津浪まに中晴て雪に跡ある浦のさよ鵆

万六
妹かこひらのおつの松
うちよするとほすの
ころもうつなり

海邊擣衣といふことを
藤原雅永朝臣
雲まれはわかの松原ふきこえて塩干の田鶴のあはれ空なき

延文百首哥奉りし時　入道一品親王尊道
浦嶋の消そはおりける山深きおもの人の袂なかれやは鈎きえん

後深心院前関白左大臣
雪とみてことひらの猶はしろたへを神の社も雲にとふらん

正治二年石清水若宮哥合に
藻璧門院但馬
正治作[illegible]　有疑
さしぬまよ人めかれゆく山里に物さひしくの庭乃白雪

貞和百首哥たてまつりし時
前左兵衛督直義
雪ふかみくる人なき道たえて雪まこそしれね宿のさひしさ

延文百首哥に　中納言為遠
とはしさらは雪をもめてしいつまても待まて人の音信もせし

宿廬にて五節乃夜いふことをよみ侍ける
後深草院弁内侍
雲居もさそこひしかりしをたえすみるきぬ光の鶴

冬歌中に
前中納言家重
雪ふれは人こそとはね津のまにまつりかへしの袖にあられもちらす

万十七
矢形尾の鷹を手にすゑ
三しまのにからぬ
日まねく月そへにける
万十九
いはせのに秋萩しのき
馬なめてはつとかりを
たにせすやわかれん

伏見院に三十首歌たてまつらせ給ひける時

永福門院

第乗のうれ世は神もおなし也座大の新よおもひの空や

後小松院にて人々歌をたてまつりて五十首
つかうまつりける時曙鷹狩を

権中納言雅縁

明暮の影もあらくなりておの鷹ひきすゑく出る狩人

後九条前内大臣家百首歌合に

按察使顕朝

いもせ姫よるもなれてならしゝおの鷹をまますへかねは日に
まり

勝句以下

永和二年百首歌たてまつりけるに鷹狩を

後圓融院御製

みかりせし野へのみゆきもむかしとはいふつきぬ世まても狩やならまし
おもし心をよさせはからまし

崇光院御製

御狩せしかりたの原も今はよにあはれ野の雪そわかぬな

延文百首歌に

権中納言為重

雪ふかきかりはの雉子はかくれてもそこともしらぬ鷹のあはせぬひもさし

建保名所百首歌たてまつりける時

前参議忠定

こし鷹はかへるやまにもまちえて交野の原に霧かゝりけり
文保百首歌に　弾正尹忠房親王
箸鷹の尾ふさ（鵇 ツフサ 和名）の鈴をとりかへて霧はれかねて立もはし
後宇多院に十首歌奉りける時　前大納言經継
炭（炭）竈のけふりハ空にたちのほりくもらぬほとを大原の里
民部卿為明
冬さむみ宮もわらやも炭竈の煙にまかふをちこちの山
百首歌中に炭竈をよませ給ひける
土御門院御製

後拾遺　和泉式部
さひしさに煙をたにもたゝしとてしはをりくふる冬の山里

すみてもさひしきハ大原や烟をたえぬみ谷の里
弘安百首歌中に　藤原俊定朝臣
炭かまの烟を我名にたてゝすまゐをしるき小野の山
正治百首歌に　後京極摂政前太政大臣
かきくらす深山のすそに炭竈の煙のすゑもしられけれ
百首歌の中に炭竈のこゝろをよませ給ひける
伏見院御製
暮ぬとて炭竈のけふりハまた遠き峯の雲
後宇多院に十首歌奉りける時　藤原冬基
息とハかすを　二品法親王覺助

ガラス使用

世の人のつらくは君のためなれはいましとおもへや年のめくらん（古）

弘和百首歌に歳暮

深勝法親王

色やまた日の隈川の歳の暮ゑて駒のとまらせすはし
わきてなんを

儀子内親王

しらくと思ひし年の暮の杖老乃涙しもえやまくらしくれ

前大納言實家

ゆく月日は我身に積れとも御代の抽は月日なりけり

法印守遍

おひぬるやよや年よみちのくの安達のまゆみくとまこの逢　まし（ふれ）

法印慶運

かきりなく老ぬる後の一年は身につもるまもおしまるるかな（やもし）

貞和百首歌に　中宮入道前太政大臣

おくりつつわかるる年をかさねても今いくたひかおしみなれなん

新續古今和歌集巻第七

賀哥

嘉元々年正月和歌所にて春松契齢と
いふ事を講せられけるついてによませ給ひ
ける　後宇多院御製
頼もしの宮神路乃山の松乃風にて世の末までもかはらし

文治六年女御入内屏風に花の木まさるこ
さひて人の家ある所　前中納言定家
里とをね春の花をしらかなは宿をとふらはあはてきかぬらく

從一位倫子七十賀乃屏風に　祭主輔親
あたらしき春の始に引く松乃つもりの数をいはひそへなん

題しらす　源順
いかにして人乃ぬめしとひきて八千世まて今日の人乃小松なりけり

後法性寺入道前関白太政大臣家百首歌に
祝の心を　後徳大寺左大臣
住吉乃松はむかしの二葉よりひさしき世々のためしにそひく

明徳四年三月内裏にて松契万春といふ
題をこゝろみて講せられけるついてによませ給

うもる

後小松院御製

みとりそふかくら山の松乃葉八八百萬代の色やそふらむ

權中納言雅縁

君かため色もかはらぬ松はまたいく千代へんと八千代乃声

寛治元年十月鳥羽殿にて松影浮水といふことを講せられけるに

京極前関白太政大臣

よゝ世へて花さく松のためしにもけふそみゆきのかすにいるへき

永享九年十月左大臣乃家に行幸ありて

松久映池といふことを講せられしついてによませ給ける

今上御製

うけつたふけふの雲井の松はいく代をかさね池乃さゝ波

和哥所にて松契多春といふ事を讀侍し

けり

權中納言雅世

ゆく末もおなしく契のむすふ松に年をかさねて鶴や鳴らん

後己心院関白前太政大臣家にて庭松久

といふことを

瑞雲院贈左大臣

庭の面にあまたそふ松のみとりいく千代の緑をかねてこそみん

元徳二年中殿にて花契萬春といふことを

講せられける時

前大納言為定

ガラス使用

山呼万歳とよはふこと
をおもう万歳の
祝ありしとそを
いふなるへきことハ
書にいふをよ
すへしとあるされ
と打見ゆらし

九重にかはらぬ山もよろつ代を呼ふ声ハつきしとそ思

建仁四年閏六月内裏歌合に

参議親経

花の色ハつきしとそ思ふ百敷や大宮人の手毎かさしに

貞治六年中殿にて花多春友といふ事を講せられけるついてに

後光厳院御製

咲匂ふ雲井の花乃本すゑに百世の春を祈や祝ん

これハ賀序ありて

後福光園摂政前太政大臣

清くつよひをたぬ乃末のよ世も花に祈や祝ん

藤原為邦朝臣

八千世へん君よねまれ花の枝ハ風もうこかぬ九重乃春

藤原懐国

我君の千代乃かさしとみるへきハ年にまされる桜なるらめ

建久元年四月立后乃時よめる

宜秋門院丹後

咲初るはしめの藤なみハ千世を松の花にさかけめ

題しらす

平兼盛

紫乃ゆかりうすからぬ藤の花千世の松にかけてこそみれ

[illegible]和哥　萬葉
[illegible]

康暦二年三月内裏にて人〻蔵花久盛と
いふことをつかうまつりける
通陽門院
神あれていく春ことにさく藤の松にかゝれる千世の色哉

天授四年蔵人所哥合に
よみ人しらす
君か代に山のはれなる月影の末とを（ほ）くすめる空かな

建保六年中殿にて池月久明といふことを
講せられけるに
光明峯寺入道前摂政左大臣
秋の池乃月乃影をもいく千代（古）の光を君のかゝみとはいふらし

やまとしまねの[illegible]
[illegible]

従二位家隆
万代も月乃光をさしそへてやまとしまねにすめる池水

応安四年九月十三夜仙洞にて池月添光
といふ事を
是心院入道前関白左大臣
我君乃光をそへさす万代を月に任せてすめる池水

前中納言基隆
月影のくもらぬ庭の池水にすむもひさしき君か千世もみるらむ

前中納言為忠
萬も末とほく御代には池水のそこすみぬへく月にうつらし

祝の心を
僧正栄縁

君か代のくもらぬ影をうつしてややすみの月ハ照まさるらん

永承六年殿上根合に

権中納言経家 ○ 式ア大輔藤原国成朝臣 栄 古

万代二十作者名脱

栄花卅六根合

天乃原めくる（いつる）月日のさやかにも万代をめくる雲ゐの上かな　万代二十

後冷泉院にて人々歌をよませて五十首よみつ

かうまつりけるに祝言を

前大僧正濟圓

あめのした君と月日とあふくまもよろひつくわたる世を照　小

東三條院四十賀の屏風に人の家に宴游

する所

源道済

松のはに浮ふる雲のかけまても千世へてくれぬ影まされる　なり

弘安八年三月西園寺に行幸ありて従一

位貞子に九十賀たまはせける時

竹林院入道前左大臣

いにしへの行幸もまれなる九十年まて積りぬるある年の数　かな

知足院入道前関白太政大臣亭に侍ける

時池かゝる島につるすむといふ事を

康資王母

万よつるか◯に万代かねるへくけつ我君になそまつるかな

太宰大貳國章か子むませて侍りけるいかに

家集云北山[illegible]の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

家集云[illegible]
万代も[illegible]
[illegible]
[illegible]

流かりしける破子乃絵にかゝせ侍ける哥

清原元輔

住の江よ濱乃まさこの岩となりていく經ぬらん猶とこえ之人

家 をとくのな
しとゝえ 家

一万十四
こ河のをちらくまの
川のさゝれ石は
しつくとおもひ
ろきま

正治二年百首哥たてまつりける時

式子内親王

君か代ハちくまの河乃さゝれ石の苔むす岩と成つくすまて

題しらす

大蔵卿有家

我君ハ八千世の数をこそねとも松乃末え久しかるへき

後小松院位におりましける時庭松契久と云事を講せられけるに序奉りて

成恩寺関白前左大臣

松のえに露やれはかて引されし庭まゝ千世の数とそふらん

福照院関白左大臣

さゝくらに松乃ちよりハ久しくも雲井の庭にふりてよろへん

後今出川前左大臣

末世まてもかはらぬ色ハ君か代の数をちきれ庭の松かえ

権大納言為尹

うけつたふみかきれ松にみえてかりそ千世をもかけん君か代

題しらす

大納言経信 末

大井河久しきをは新らつをも岩ねのおもの乃松えしらん

と

（詞花 君か代の久しかるへきためしにや神も植けむ住よしの松）

人のこうませて侍りける七夜によめる

清原元輔

千とせとハ松と亀とにまかせて八百万代ハいハてこそみん

永承六年殿上根合に

中納言資綱

春日山枝さしそふる松の葉ハ君か千世の数にそ有ける

題しらす

前大僧正慈鎮

君か代ハ千世をかそへん住吉の松吹風ハ末もかはらし

堀川院御時百首歌奉りけるに祝の心を

中納言国信

松陰に宮つくりせる住よしの久しき世をハ君そしるらん

日吉社にまうてゝよみ侍ける中に

按察使公保（一本二代作者 墨滅）

浅からぬちきりの猶もたのむかな千代そん代のかしこさ

元亨三年七月亀山殿にて人々に歌よませ給ひて七百首哥つかうまつりけるに寄露祝を

惟宗光吉朝臣

大井川やみゆきの跡をかさねても千世とそ祝ふ露の衣

應永廿六年三月仙洞にて寄鶴祝と云事を講せられけるに

紹宗院贈内大臣

ガラス使用

我君のみさかりをとくまむ川やちよ世の数と引くなるらん

権大納言實秀

末とをき千世の友とや我君に引く御の田鶴もなれむらん

権大納言實秋

よろつよに御の池もよえてなかれゆくやの山乃萬代の声

百首乃寄代中に

後小松院御製

むしろ田のいつぬき河乃川なとにすむてちとせ見えし之

千五百番歌合に

惟明親王

ちよのまむいつぬき川のきよき流にすみまさらん代の数かな

醍醐入道太政大臣

鈴鹿河ふるき流をつたへきて猶末遠き行く君か代に

正治二年百首奉りける時

宜秋門院丹後

神風やみもすそ河の底もみく流久しき君か代の数

同年石清水若宮歌合に

参議雅経

君かすまもる石清水すむ世の数や萬てみるらん

寄日祝といふことを

源持賢

朝日さす影も千世をみかさ山峯なる松のみとりのいろかな

貞和二年百首歌奉りけるに

ガラス使用

前中納言雅孝

天の下すなほなる世と成にけり君かめくみや四方にあまねら わら

同年十一月風雅集竟宴をこなはれける

時つかうまつりける　後山階前内大臣

我君のみかきまさる玉の光まて万を世ともさかえて照らん

前大納言公泰

おさまれるわかのうら風静まりてみかきつかむ八千世の数ゝも

延文元年六月内裏にて人々三首歌つかうまつりける

まつりける時寄道祝言といふ事を

民部卿為明

わかの浦にあつめて尽くむ玉拾の石あまたの代に見えけらん

康苑院入道前太政大臣家にて三首歌

よみ侍りけるにおなし心を

四辻入道前左大臣

みな人の心もみちを玉鉾の道ある時とくりかへさ 世よ

文保百首歌に　前中納言實任

くりしれは文はむかしの跡をそてしりにし代々のとけ(か)は

永和百首歌奉りける時

権大納言為遠

まさこくに猶しもあれを数わの石よりひろき君かめくみ ここと

百首歌奉りし時竹

左大臣

君や今うつぬるさまに契るらん竹の薗に萬代乃かけ

題しらす　　権大納言長家

池水にうつれし名代ゝ流をもよ久しき代ゝをすまんとそ思

左大臣家にて池水久澄といふことを

源滿政

萬代といはふをとめくる清流まて静にすめる庭の池水

寛治元年大嘗會悠紀方屏風にある

野村　　前中納言匡房

我君の千世の数をも五月雨のかた野の村乃杉のむれ

仁治三年大嘗會悠紀方屏風哥

前参議為長

春風は枝もならさぬ静にてなひくみとりの青柳の村

永仁六年大嘗會悠紀方屏風に花垣

里　　権大納言俊光

白妙の雪かとみえて咲まつる卯月に白き花垣の里

暦應元年大嘗會主基方稲舂哥

正二位隆教

万代のためしにかれく田上や林のさ川かのならひこのを

永和元年大嘗会主基方屏風備中
国松山　　権大納言忠光
すくゝりか花さへぬへし松山の末まてとゐると鶴ら白雪

新續古今和歌集巻第八

釈教歌

一念のみのりをきゝし人乃みな三世の佛の師とそ成なる
此方八一條院御時上總介時重とりすゝめ
国よりまかりて千部法花経をとゝの世侍る
夢乃告に日吉十禅師の名あさせ給けるとなん
袋草子
梅の木乃枯たる枝によるのとも花さけくと佛そまもる
これはまつしき女の清水に百日まうてゝ侍けれ
あくる夜の夢の中に歓喜乃つけさせ給
けるとなん

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166　ガラス使用

一色一香無非中道の心を　　前大僧都祐桂

梅か（古）ゝも色もみのりにはさらにまてらん今ころ

文永二年白河殿にて題をさくりて七百首歌よまれ侍りける御会を　　花山院前内大臣

世はいのちまかせはしあの法きれは君かみゆきれ頼みなりけり

法華経序品我見燈明仏　　前大僧正慈勝

このしひの光をきゝてしる人はこの法の花を誰かしらん

すてられはつる彼
宗の大悟あり大悟の
時もありとらけく
つゝしむへくもなし
悟りのさまをあら
さまして

おなし系乃心を　　権中納言雅縁

今そしるみのりの花もめくるさ世になかしとけゝる人の教を

嘉元百首歌中に　　萬秋門院

ひらけぬるなかの法の花ゆへにあふさき世かけて頼む哉

見解のありさま僧にしめし侍ける　　仏国禅師

ひらくるも心ゆかれ山さくらはなよりあらぬ花ともとてこそ見れ

宿殖徳本衆人愛敬乃心を　　重阿法師

いそのかみふるきみ寺の桜まても木末まてもさかりなる花そ見る

題しらす　　　　　　前僧正慈鎮

峯の雪れむらつもる松の戸はたえぬさくらく萬法

瞻西上人法事をこなひ侍りける時人にかはりて

けちえんをとらへて通りけるにひとへに人をたすか

よみ侍て　　　　　　神祇伯顕仲

夏衣のりのみをやみにぬきつれはわか身のうき瀬にまよひぬる

方便品を　　　　　　藤原季経

うれしくもわれらか法の花の色に蓮の花とそみる

舎利会をこなひ侍りけるつゐてに蓮を

後京極摂政前太政大臣

此世にはむすへる縁のまゝにこそ我ちかひのむねのまことに

立信上人の許にて法文の事なとかたりつゝ

かはつくりては涅槃の譬のこととかれ侍るは

おなしこゝろの法をかたりしと侍りけるに

なり　　　　　　大浄門入道前内大臣

さしめくみ命をたのむこゝろをやおなしさとりと結ふ

建保七年二月五日般若心経を講せしめ給ふ会に

後鳥羽院御製

神のよにおこなひしらき露やらうなからむかしにかへる人なれ

中納言為家周忌に結縁経供養しけるに

ガラス使用

無量義経徳行品を
　　　　惟宗光吉朝臣
ふかき江も影うつりつゝかゝみえて氷れる月のかけあらはれ
　　題しらす　　　　法印慶運
岩間もる流のすゑの浅しともふかきみのりの月の影をうつらん
　　正治百首哥奉りけるに
　　　　定家卿
いかならんのやまともなくわけ入て鷲のたかねにすめる夜の月
　　寿量品の心を　　従三位為理
定なく消ても空にさやかにて海にしつめる有明の月

同品一心欲見仏　藤原高範
入月をしたふ心の深からは二たひいてゝ影はみえまし
あかつきの音まてまちそあかさむ
　　　　僧正家縁
こゝろ鷲の山より九輪をかゝりきてこゝも此所の月やとるらん
家集不載
　　釈教哥の中に　　清輔朝臣
月は入朝日は出る中空のひまにまよへる人そかなしき
　　提婆品の心を　　寂然法師
わたつうみの波のそこやはなれけんさとりの花をひらく龍の娘
　　白河院七百首哥に維摩会をよませ給ける

ガラス使用

もろ　　後醍醐院御製

於安月時家からりけるに四條にて年月をへてかへりさしの事

元亨三年七月亀山殿にて人々題をさく

りて七百首歌つかうまつりけるに不説四衆過

罪戒の心を　　権僧正為雅

とかのなかにありてもつゝむ嵐にもいはぬを我もさため

不軽品乃至遠見四衆亦後故往礼拝讃

歎　　前権僧正雲圓

あふ人によそに礼拝の名こそまつらいて誰もうやまふらん

西路百千万年かゝる時立神通の地心

通を　　参議雅経

みな人のこゝろくもれる宮の月をてらすともめ

序品照于東方の心を　　前大僧正慈鎮

ひかしをはまつてらしける出る日よりひかりをのみなかれけり

人をかたらひて勧学会をこなひける時に

おなしく入於深山　　藤原仲実朝臣

鳥の音もきこえぬ山にうきねかもかゝるこの人をきくらん

如是縁乃心を　　藤原盛清

ひとはいかにあかしてやらんのまよひにあらん

新勅撰　　八條院高倉
白雲のいくへの峯をとふつねとも法の
をしへたつやまんらん

嘉元百首歌に　中納言為藤

いふならく法の庭には車のうちはあらそひてそは（なりし）

瑞雲院贈左大臣法華經の料紙
のうらにふてくの文字崇賢門院かくめさせ給
ける時譬喩品の心を

入道一品親王永助

みちひろき三の車のまよひくもおもふかたにやめくらむ

浄土の法文をきゝてしめしたまひつるは法源
のちくは法性院といふ所のあるよし人の申
されけるによみて侍りける

後小松院御製

うれへ人の頼てきえてやりそうく世のさかれとねかはれ

三心具足の心を　後光嚴院御製

たのまねはふかくけふも一すちに頼むこゝろをいつはれんやは

三世の頼を観するにて一夜の夢なとしい
よはよめる人の隠生をとゝむよし藤原政
上人の許よりつかはすとて

二品法親王道淳

うつゝにもいまはおもはし月のさかりのうちもみし夢ゝにたゝむ世は

錫杖の声をきゝて人にしめしけるに

小辨

行すゑの夜はいそらさ海さましきみちのはてをかくらさら

上覺上人乃許よりとゝろ事はこれつねのあるせ

ことさら世をいとふさまこゝろ強のちからなきことやより

行ろ為事に　高辨上人

も庭の夢紙をはしるかはなくてこそかくる人をほ

前中納言定嗣經文こゝろをよめ侍りける　金

光明經懺悔品をよみかくつかうまつりける

傳正實瑜

夢ならてうつゝとみえぬかりの世はさめぬやみのゆめにそありける

涌出品令諸大衆謂如来日の心をよめる

法印經賢

かのくにも行やすからん鷲の山をしらすは法の道しるべ

弘長百首歌奉りける時

後九條前内大臣

西の海こえつゝ志をまつ世にて秋をまちぬ法乃花立

正治百首中に忍辱波羅蜜の心を

賀茂季保

はらはらとたえぬこゝろはそれ心の花乃ひらくぞ

女のうちへおこして仰遣つかはしける寺師上人

新後撰尺家
蓮生法師
むかしつかへさりしとて
むつかしくおもひしを
ゆかなさとしかけり

まかりて帰し時よみて紙にかきてさしをきて侍
けり　　権僧正永縁
みるまゝにいとゝ涙やまさるらむ清きながれもあはれなりける
返し　　よみ人しらず
あるじの時のきよに読経に帰り来て昔にかはらぬ事もあはれ
地獄の絵にしての山を女の見まかりけるを見て
かきそへらしよらふさらぬ事をかく
二條院宣旨
ほらかし罪となりてあら人もなくさへゆくしての山路
嘉元百首歌に　　前中納言為藤
鷲の河にながれぬほどは花とちるむかひの岸も山のはの月
浄土三部経書て罪業にて供養し侍りし
に権中納言具行いまうでて讃嘆し
侍しかは又の日よみてつかはしける
頓阿法師
山の端の入日をみても招くらむ我かぞふるもみし
返し　　権中納言具行
山の端の入日をいそぎて招かれん我身にいさぎよくまつ
元亨二年四月亀山殿にて人々歌をよく
侍て仏前頌つかうまつりけるに尺教

ガラス使用

権僧正道我
塵泥の残る乃流をいかにしてせゝに絶すはわけてこし世　乃ん

伝法灌頂乃後法法（流）のすゑを思ひつゞく
人の許へつかはしける

権僧正道勝
かくてこそ末乃光をかゝけましよゝにつたへし法の法乃ともし火

鹿苑院入道前太政大臣園城寺廻礼し
侍りける時思ひつゞける

前大僧正道意　寺
法の舟こゝと渡りと定めてん神乃ちかひハいまもかの岸

故大納言為世遠忌に人々すゝめて結縁
経供養しけるに厳王品を

前大納言為定
今そしる枝をつらぬるちきりとてさそひもしおやの心ハ

後撰雑一　兼輔
人のおやの心はやみに
あらねとも子を
おもふ道にまとひぬる
哉

おなし品の心を

権律師玄覚
迷ひし心乃やみをさへてそ子は親の月をさそひし

妙音品及衆難處皆能救濟

皇太后宮大夫俊成　二名　丈木

丈木卅四
わたつ海に沈みし中のもくつまて法のへたてはあらしとそ　さり　行さ

龍恵舎利會をこなひけるついてに法文の哥

よみ侍りける中に　　前大僧正道慶

むかしきく鷲の高ねの嶺の雲そらに清く見ゆる哉

二乗を　　明観法師

（新葉尺教亦載之　右近大将長親）
うきやみとつきぬ法の舟さしきて世のうきと渡らるれ

縁覚の心を　　よみ人しらす

（新葉尺教）
をしめつる花もちりぬ（中務卿宗良親王）と空もなくて（さとりて　新葉）心の色そ今はかはらし

餓鬼界　　前大僧正道玄

涼しやといはせの浪によりくれはまつかなしひのこゝろかはれる（うらみ）

題不知　　前大僧正杲守

よしさらはたえぬ心のやみをはらふてしれ夢にはまよふ迷ひなれ

中納言為藤周忌に法花経の心をよませけるに

安楽行品の心を　　権大納言公明

たのもしと何おもひけん秋の夢のちかひ月をまことの光なりけり

おなし時信解品を　　後宇多院宰相典侍

まきれなく心の花をさとりてそ迷ひし程の暗ははれける

釈教歌の中に　　よみ人しらす

君頼ひぬる身のさかり家を出てし四方の車にのりそ乗れる

高野にまうてゝ法の深きを聞て侍て

そのかみ金剛峯にまいりてよめる

元可法師

高野山うき世の夢もさめぬへし暁を松のあらしに

美福門院に極楽六時讃の絵にかゝるへ
き哥奉るへきよし侍りけるにあかつきに至る
時に猶聖衆の天乃楽をきく

皇太后宮大夫俊成

建本卅四人哥

浪のよる空乃あかつきの風乃音もさけに仏の御法なるらむ

身雖遠離心不遠離といふ事を

寂然法師

かりそめに思て出ぬるすみかなれは心は人をとゝむへきかな

後法性寺入道前関白太政大臣家百首哥

於五種行の書写乃心を

正三位季経

たれもみなそ法のみちにかき遺のあとの紙をゝく覧

題しらす

勝定院贈太政大臣

ふりぬれし思ひつけゝるみちくれなきまことのひを白河のそくこん

ガラス使用

新續古今和謌集巻第九

離別哥

ともなれあつまへくたりけるをとゝめまほしく思ひて
せてまうかさすなれはよみてつかはし侍り

藤原顕綱朝臣

あつまちは月日をとはもしてを○は衣の関のあるをおもひ　いますゝ

命文字給うまかる付

九条右大臣

年事のわかれはかなしとおもへとも人こそ人こそえれあれ

二条太皇太后宮式部にいひまかりけると派

まかりて猶ことしに人につかはしてあつまのかたへ
いつかあはれといふ人にあはん程もしらすた
くもゐの空のみなとをてなくさめし人へと
ひくいひつゝしまゝ　左京大夫顕輔

おもひ川わたりの舟の業乃名まてみちて川へきゆの舟

別の心を　前大納言隆房

またれし人やいつてか遠茅原まて〇お花はよそめにかはれ

権中納言基綱太宰権帥にてくたりけるに

もろともにまちつゝてわか身はてそつらきとはて
よめる　源俊頼朝臣

敦末

行末はいきの松原なからへむ世はさためなき命をかけてまし

大納言経信大弐にて筑紫へまかりけるに（師なりて下り侍りける）

につかはしける　　周防内侍

頼もしくいきの松原於あらは世をも待へしと思ひ
あひ思ひけるもはかなのみちのくの人まちかねて
こしかたは月あるときは秋人とわくらにと待ちこそ有へ

讀人しらす

寂巌法師

忘れはと秋の月見し光をは誰も空にのみ見てはなれてはらる

古
君か別路にて別るゝ時なかなか見えて別れのそ

云ふ紙　　能因法師

旅衣秋の月みるほとはいかにあはれのかさならまし

別の歌中に　　権中納言雅縁

いかなれは山路に立わかれ別れんとしは別をたのめ
流れのゆくへまよふわか身も女に餞し待りそ
まよふ

藤大納言資宣

と
都まて心や君に立そひゆくらんしらぬ旅路をなかなかけまし

亀山院御時百首歌に

祐子内親王家紀伊

待とてのゆくへもしらぬ別路にしはしとて扇の名をや歎かむ

去日秋ありぬる百首歌中に別を

ガラス使用

皇太后宮大夫俊成
わかれても宮こしもつまれ旅衣たち離ては日数へむとも
まつらしまあまかゝらんそてのうら人の袖は
かはかしものを　寂身法師
浪山と見し家にやそへて心つくしの旅にてしらる
悲し　よみ人しらす
海山の浪のへたてはかはるともたのむ心のみちはかよはて
文永二年七月白河殿にて人々題をさくり
て七百首歌つかうまつりけるに餞別歌
と云ことを　藤原資宥

旅衣さらにわかれとおもふすにたゝむ夜月も影はさやけし
相しりて侍る女の遠き国へまかりけるにつかはし
ける　源三位頼政
よしさらはわかれもゆくさきもおもふ波のたちわかれしもえこそ忘れね
千別　新勅雑二　新拾別
盛尋法師もろこしにわたりはへるとて湊
にて舟出し侍るとき文を流しける
日はなかく京をまてしはしわかれは
盛尋法師母
我袖にかはす涙をとゝめおく身はまたこそ忘れめやもしらん
逢みんと思ふ心はかはらけてあひやまくまて待ちなん

ガラス使用

後拾雑三　式部内侍
こゑあまりちけきな
しとゝひけるしの
いさゝしふるきつ
みちしのに

河内よりのほりて日比侍ける人のゆかんとし
けれは君さへとゝまれかへさのきこえしまとひけり
よみ侍ける
山口重如
なかなかハ君にあひみて別るれハ我もさてまた心ちやハせまし
尾張国に京よりまかれりける男にくしてひさ
しく侍けるか男のかへらんとしける時よみける
おもひ出ハいつへさんらむゆふくれにいひはなるらむ
傀儡河こ
しぬはかり歎にまさるくたなひい歎とさそまの心よとられさふ
修理大夫顕季かもとにまかりけるに

時雨さかりに浦に出て舟に乗れる海
猶さるゝふみもみえねハさみしく
津守国基
待らくれ憎もそもみなへきにはなへにかつ葉の霜のあか
十月はかり女のもとへまかりたりけり
橘則長
冬まとはしとはふいのかん袂霜月かくまたしくもまれぬらん
崇徳院位におはしましける時百首歌奉りける
よめる
前参議教長
思やれ慣しことのわかれにハ雲もまたいかにかなしき

こと世に[illegible]つかはしける[illegible]の国
よりのほり侍りける時[illegible]
かりそめの[illegible]
このくふのやすくみそらに
なりにけるに[illegible]
[illegible]
とりつかはし
[illegible]の師のもとに
やまとうたよみけるを
[illegible]つるを
長能まうけ侍りけるに
[illegible]
きりこえ[illegible]やくにたえ人
[illegible]の下[illegible]と[illegible]

うきよには常陸にありてよろしからぬ侍りける時
そくつかはしておほよそにひつゝ侍りける

俊頼朝臣

まくもやくつまこそめてん常陸なる[illegible]の山のうめの世や

久安百首哥に　参議親隆

何しも出ひもたてぬ方なれかも知[illegible]の上にれなりけり

かつさの国にくたり侍りける時人のゆきかよひこ
せ侍りけるとしに

藤原長能

わかるともまたもしるしや東路の末の下[illegible]

堀河院御時百首哥に

ゆし
[illegible]
[illegible]
[illegible]上総[illegible]
年[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
へき
[illegible]家集

神祇伯顕仲

かへりきてしらん人さかりもまれの別の哀なりけれ

題しらす　安嘉門院四條

わすらぬ方を[illegible]やうけさりけりと別なれとも

藤原助信朝臣備中守になりてくたり侍りけるに
て義[illegible]扇[illegible]つかはしけるに
[illegible]して　冷泉院御製

[illegible]の人のむらさき[illegible]

返し　藤原助信朝臣

君ひとり[illegible]人のまた何をしも

西院皇后宮上東門院と聞えけるはしめて世
侍りけるほかによそへて世侍りけらはひ出給ひけりと聞て
まうてゝ世侍りて出家もし給ひてさりぬるよし申て山
いかなる世をしのひてすみ給ふらんと申させ給ひけれは
つかはしける　　　上東門院

いとゝしもうき世の外におもひやる方をしらねはたちかへるらむ

続後拾遺集中
又 続拾遺

式部命婦にものいひわたりける時扇をつかはす
とて　　　四條太皇太后宮下野

山のはをいてゝいるとも大空のやまの月とおもひきれ
懐にいれしものを時そみるへしおもひやらく

ちかくなる京へゆかりの侍りとて
　　　脩子内親王

うれしくも花乃さかりにあへりあれハ思ひしるらん
　　　藤原範永

新續古今和歌集巻第十

羇旅哥

寶治二年百首哥奉りける時

前大納言為氏

旅人の曉いそく関の戸ハあけぬるほとやまたるらん

新玉津嶋社三十首哥に

式部卿邦省親王

打浪のゆふ〻をきけハ旅人のよ川を別ときゝや侍らん

題しらす

紀盛家

東路にあてゝこゆる雲霧のあれ野やふかくわけてきえらん

百首哥奉し時

前右兵衛督為盛

里の名も中々こそゆかしきと思ひすてゝいそく旅

寛治元年九月十三夜仙洞にて十首哥合に

後鳥羽院下野

旅ねして一夜宿かる松かね○ふかくわすれは床くらからん

新玉津嶋社三十首歌に

頓阿法師

今日みれはもやかれぬ旅の宮部乃山の跡はかなきを

春乃比旅まて月を見行く

和泉式部

春の夜の月を雨もよ○はもみるかな宿のなき
題しらす　恵慶法師
春ことにあさち猿の花に誘へさそはれぬもての
浪ゆしくくの時苔かさなる○に清水の音
ともなひく　前大僧正道昭
音なき山の峯や残るしら雲○はたえ苔めくされ
蓬宿のへとゝめぬ世にゆらむ
後小松院御製
かりそめもまた見ぬ花の残りに散らぬ○まてしらさき露の花
雨そふ年月時　善成朝臣

かくれ月霧にそふる猿衣まちし旅のうへにてそま
わけよ人に浦つらし月をみくらす浪けく
そり　登蓮法師
なにとなくも心のあられてみつれ心尽くつまかくる月影
羈中送月といふことを
有明の月影にしらぬ道をゆくつる旅の日数かさねてしらぬ
題しらす　源時清
あきの浪山にけ衣さてたかさね接ま悔の時雨かな
旅懐思といふ事を
読人しらす

後撰九
山へいりて　恒基法師
神無月しぐれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あひやら[illegible]山の端[illegible]

熊野にまうでてまかるとて

増基法師

[illegible]しぐれけり[illegible]神無月猿の声までも[illegible]

弘安元年百首歌に

花山院前内大臣

猿なく[illegible]山の[illegible]雨にそ[illegible]

猿声中に

観月法師

[illegible]やつれ[illegible]いくうたかたの夢の[illegible]

平氏数

かへりみる[illegible]月[illegible]

圓照法師

[illegible]山の[illegible]ゆくへとわきて[illegible]

題しらず

素暹法師

[illegible]山[illegible]

建保二年八月内裏歌合に羇旅

大納言通具

[illegible]神もすむ[illegible]山[illegible]

正治二年百首歌に

後京極摂政前太政大臣

百十二
ましらなく[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆかそてやかれおきさみ山のはま○ましく旅衣かな

賀茂社に奉りける歌の中に
　　　　　　　　権中納言定能
ふゆらふふるねのやさふる里の月積まれへく行やらん

旅歌の中に　　　　源頼豊
とりもさそて夢のうちを限りてもろともとまり旅ねの空

羇旅中夜といふことを
　　　　　　　　権中納言雅縁
月はしろえさまかれさてさふもとこめ草の枕を

家にて百首歌よみ侍りけるに旅を

　　　　　後法性寺入道前関白太政大臣
恵ふ人をまちし旅ならねとも昔の枕は露をもしけるや

題しらす　　　　　源光正
かり旅ねより思ひさゝの夕まくれも我身の里と思ふ浦人

　　　　　　　　賀茂成久
をみうきも心とまるもえぬれきハ一夜の旅ねやり也けり

関旅を　　　　　平光俊
名迨人もまつ白河乃関こえて秋風すくと誰まちてかし（え集）（続国）

二条清輔朝臣只参家五十首歌中に
　　　　　　後八条入道前内大臣

末松山旅人の
雨もあらみよと

遠見えし雲の戸出て夕浪のさそはぬほかにきえて旅人

百首歌よみ侍し時　権大納言實冬

猿声も涙をよそに見てく秋の嶺の末の旅山

貞和二年百首歌奉りし時

前中納言雅孝

暮やらて日影ハ猶またかゝり山のはらまてやまくゆくらし

入道贈一品親王尊円

くれかゝる山の下庵ふゆきをハやとるまてにそ人のやと

嘉元元年伏見院に三十首歌めされし時

つゐてに羇中旅といふ事をよませ給ける

後伏見院御製

ゆきくらす旅の末ともおもはて宿とふ山の暮れかゝるかな

圓光院入道前関白太政大臣

深山路や夕こえくれハ里見えてとまりさためぬ旅そ行なる

文保百首奉りし時　弾正尹忠房親王

松浦山夕こえくれハ玉嶋の里にてつきぬふかき時

羇旅の心を　称名院入道内大臣

くれし旅や尋ねん里とをき山のかけちに暮のさひしさ

たゝ富士見んとおもひたちてあつまにくたり侍し

時おほくのとしをへて宇津の山をこえ侍

ガラス使用

一新古　俊成
蔦まてもしと思ひ
しくしらぬ身の程
まてきてまとふ覧

ぞて参議雅経卿にいひしむかしハ夢かうつ
続古今
の山としふる事をおもひわく
わすれもせすつたの下道

権中納言雅世

蔦にむかしとおもふうつの山こえてうき世に渡るつたの下道

家にて歌合し侍ける時蔦を

後京極摂政前太政大臣

宇津の山こえしむかしの跡ふりて蔦の枯葉に秋風そ吹
伊勢

題しらす

法眼宗親

都にやきゝてやらん猿衣日も夜もなれのうつの山越

寶治百首歌奉りける時

葛城の宮ゐ神よ
わたしくるくの
旅ころもほしき

正三位経朝

宇津乃山のこえて露をふみわけてかなしく猿のなく声

元久二年六月和歌所詩歌合に山路秋
行

如願法師

葛城やよるにこえし霧のやま猿さけふなり林の夕暮

元亨元年八月十五夜内裏歌合に寄月
猿

前大納言実教

葛城にふくる空ハ猿なきて月そこゆる峯の梢

寶治百首歌たてまつりける時

参議雅経

ちかき秋のさよの中山明やらて月に越る河杉の旅人

守覚法親王家五十首哥に
従二位家隆

宇津の山月よりぬ寄の袖に夢路をしらぬ風の音哉

寶治百首哥奉りける時
前大納言為氏

あつまちくさやの森のから秋山もみちにぬよ旅かさねつ

文保百首哥奉りけるに
法印定為

あつま路のとをやかけてさかりぬる月更ゆきを旅しそふ

遠明日香宮ハ允恭天皇
其王衣通姫と此天皇の
妾姫也をもひしまし[illegible]を
かくきこえけるや

[illegible]世侍し新玉津嶋社哥合に羇旅
権大僧都堯孝

草枕まくら夜々の秋もまたさわ川おもひみやこ恋しも

題しらす
従三位雅家

引きむすふ草の枕にゆふけもかりそめぬ夢

前大僧正果守

いくよかさね旅の夢もみはてゝあかつきおきて露の枕
瑞禅法師

ふかき夜もせの夢に枕かはす旅ねの鐘の声
古
源家清

相思ふ旅の〇乃東の枕よりあさつゆむすふ野辺の秋風

よみ人しらす

武蔵野ハゆけとすゑそはてもなき草ね又やむすはん草の枕に

延文二年百首歌奉りける時

前大納言為定

むさしのをへたてゝ見れはさかひなくさこそ人のすみかなるらめ

羇中送日といふ事を（伊勢）

後成恩寺関白前左大臣

かつらき浅き人ハ久しき旅路や末しれぬ旅の日数に

弘安百首歌奉りける時

後嵯峨院大納言典侍

思ハすよけさみるにもいかゝねん山路をやとる遠き旅人

旅哥中に

後野宮入道前太政大臣

たれしもこゝの旅にみてまそてらつらんねの白雲

源義實

あつまちハ又もいくへきとしらて（古）〇の夢にやとゆかむよの中山

正治二年百首歌奉りける時

前中納言定家

草枕夕霧なかくふさしの（万二）葉に山もさやかに秋ふかきぬ

宝治二年春日社歌合に旅暁月

新古羇旅　貫之
こえぬまハよしのゝ山のさくら花人つてにのみきゝわたるかな

新古旅　家隆
あけハまたこゆへき山のみねなれや空行月の末のしら雲

万二　人丸
うつせみのいのちをおしみ浪にぬれいらこの嶋の玉もかりをす

ガラス使用

津守国平

草枕結ひもさためぬ夜はに月を友となれて空に立ぬる

元亨三年亀山殿にて人々に歌をさゝけて
七百首歌つかうまつりけるついてに羇中橋
と云事をよませ給う（ふ）ける

後宇多院御製

さそふとも又めくれる山をこえくれてやとの庭なる人まつのよ○
旅寝の中に

前中納言公雄

あしられてハや里ちかく成にけり山路の末に入相の鐘

後宇多院に十首歌めされける時

中納言為藤

あしからし男山の麓に宿とへハ八野山ふかき鐘の声する

いときなく侍し時親にしたかひてあつまの方に下侍
に三河の八橋といふ所にてよみ侍ける

堀河院中宮上総

八橋とゆく人ことにとひ見まやそこに誰をおもひわたら
れとし

あつまのかたへまかりけるにあふみ（美濃）と（と）いふ
所にて雨ふりて侍けるにあるしの心あるさまに
みえけれハあるしにかきて流さく

湛（湛）覚法師

ガラス使用

ふるさとめや枕を旅に新しくわかまちらよさ浦のんと

返し　　俔俔侍従

東路に君か心をとまれとも我も都のつきなかめん

井関の山をこゆとて　　道命法師

清田の瀧ちかきをさかれてゆかぬ花の山をとをこゆる哉

麻花院入道前太政大臣家百首歌に
旅宿夢といふ事を　　権大僧都覚尋

草枕ふしみの旅にこゝろなき人はいつかあはむとすらん

羇中述懐　　権中納言公時

旅ねする野上のかり庵の旅衣にもうき世の露そかゝる

二品法親王守覚家五十首に　　法印経賢

思をわかく出し都の月にさへかはるひの空か

旅歌中に　　度会行忠

旅衣ほそ野の花露にて袖にみなれし月の影哉

題しらす　　前中納言定家

駒とめしいれまつち山をこえて人まつこぬとの濱なるもれん

正三位季経

あはれなりか宿はなくて旅〇の床かりにしく袖そつゆけき也

みかけたる人の面影
まことゝもおもへるけ
これをさるのしのと
ソヘリ

万十二
いてわかこまはやくゆきこそ
まつち山まつらむいもを
ゆきてはやみむ

前僧正實伊

霧ら（は）さそれいしゑもかのなかり山路の月はれにけるかな

羇中夜情といふことを

永陽門院左京大夫

ふるさとの野辺の枕の露けさも衣にたえぬ秋の旅人

弘安元年百首歌に

土御門院入道前内大臣

旅さそれておもひねにや（古）ふるさとの夢もみえぬ山をこえゆく旅人

題しらす

よみ人しらす

（万三　赤人）あへの島鵜乃すむ石による浪のまなく此比都（やまとし　万）しおもほゆ

月前旅行

中務卿宗尊親王

旅の人乃（万二）袖乾月に見えて露ふかき浅ぢ原家りて百そらゆかんなりけり

養源院贈左大臣

かり枕ゆふわかれのさゝ原にほのかもさてやここに見ん月の明さん

旅哥の中に

法印経賢

月もろ（ふ）旅おなし宿にふ乱ついく夜の枕乃露はそへて

旅宿秋月といふことを

大納言経信

旅ね○するあしのやそへる袖におもひうつりせぬ秋の月かな

月をと旅のとこ
うつしそへしを
なしとよの月つかれ
うつすつらさいぬと
とわまそゝや

海路を　　二品法親王覚誉

こく舟やとまりさためんかゝりうら浪の松をとひかてにして

嘉元百首歌たてまつりける時

法印定為

白雲は浦よりをちにへたつれとなほ見えわたる浪の上の松風

弘安元年百首歌奉りけるに

前大納言為家

嵐の音浪のなかれに住み馴れて松も雲ゐの月を見るらん

住吉社によみてたてまつりける

祝部成仲

侍りしとさくらんくさしまろとにいらん浪のさわくらん也

文保百首歌奉りける時

中宮大夫公宗母

清見かた波まにのこる夜の月の浪の枕も友と成けり

法性寺入道前関白家百首歌よみ侍りけるに

源仲綱

舟出する浪の枕に夢をみて海士のかるもを引き替

旅泊重夜といふ事を

正三位義重

宇治川の都のみなと流るゝ枕のまにまに浪にゆられて

万七

業平

中空に月もとまらぬ浪の上はくもゐのよそに見えしかる人もあるなと思ふかな

ガラス使用

853
別
166

3243

題しらす　よみ人しらす

よそにくさけへあしやの浦風にみましもれてけふ過る哉（わるまつア）
白隣す

守覚法親王家五十首哥に

大蔵卿有家

浪のくるまの磯の梶まくら心して山はたへの鐘を聞

海邊旅宿といふことを

隆信朝臣

よるみなとにかへる風のさよ枕しらさ
猿の聲きこゆる

ガラス使用